あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 40 号

発行日
2024.11. 30
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
（井上講四宅）
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○折角のチャンスなのに、それが生かせない？

さて、毎回、このように言っているようにも思うが、近年、私が提唱している「教育協働」への機運が高まってきているように思えるが（ほとんどがネット情報によるが！）、なかなか、その拡大発展が見られない？否、そうなのかもしれないが、少なくとも私の周囲では、それが芳しくない？もちろん、私が知らないだけということであれば（その可能性は大？）、それはそれでよいのであるが、今一度、ここで書いておきたいことは、これもまた、何度も言っていることであるが、関係者は、何もしていないわけではなく、そして、諦めや無能感を募らせているだけではなく、自分達なりの変化への対応もやっているということである（過日の卒業生・小学校の教員からも、そのことは聞いている！）⁈

では、何故、それらが、前面に出て来ないのだ？マスコミが、それらを伝えて（掴み切れて？）いない？当然、そういうことも考えられるが、やはりそこには、何か大きな問題（壁？）があるということである⁈それは、端的に、問題解決の枠組みが変わっていないということである！例えば、これまでは、直接は関わっていないと思われた（実は、思わされていた？）組織や機関が、今や密接な関係となっていたり、そちらと協働することによって、思わぬ成果や副産物？を得るということもあるということである！

ちなみに、かつてI・イリッチが、人々の「生涯学習」には、「ラーニング・ウェッブ（学習の網状組織）」が必要であると唱えていたが、それは、他ならぬ学校教員にとっても、是非とも求められるものである！硬直した、旧態依然たるシステム（研修等）では、最早限界があるのである！

○雲、そして群衆（両クラウド）が降りて来た？

そんな中、現在、クラウドファンディングとか、クラウドミーティング、クラウドワークス、クラウドサービスとか、この「クラウド」という用語・発想が多用されている！しかしながら、よく調べてみると、この「クラウド」には、「雲」という意味のcloudと「群衆」という意味のcrowdがあり、日本語の発音のせいでもあるが、かなり混同されてもいるようである！

単純に言えば、例えば、クラウドファンディングとは、「現代ではインターネット経由で実施する事例が多く、また日本語の音韻体系ではrとlが区別されないため、クラウドコンピューティング（cloud computing）の「cloud（雲）」と混同して「cloud funding」と誤表記されたり、関連性があると思われたりすることがある。しかし、両者に関連性はなく（インターネットやクラウドコンピューティングを使うことは必須事項ではない！）、インターネット技術の発達前からクラウドファンディングは存在していた」そうである（ネット情報による）！

言われてみれば、確かにそうだが、とにかく今では、この「クラウド」が、双方共に重要であることは間違いない！「降りて来た」という表現は、「雲」の方なら分かるが、「群衆」の方は、なかなかピンとこないと言われればそれまでであるが（r と l の違いなのだから、必要以上に結びつける必要もない？）、やはりそれは、実体？としては、クラウドコンピューティングの世界で実現されているわけであるので、我々一般庶民からすれば、「雲」と共に「群衆」が降りてきたとも言えるであろう⁈

○「技術」で、「思い」が合わさる！それは福音であり、それを生かさない手はない！

いずれにしても、上記で敷衍したかったことは、たとえ「クラウドファンディング」（多数の人による少額の資金が他の人々や組織の財源として提供されること。「ソーシャルファンディング」とも呼ばれる）が、群衆（crowd）と資金調達（funding）を組み合わせた造語であっても、関係を超えた（あたかも頭上の雲・cloudのように！）「クラウドコンピューティング（cloud computing）」の技術を使ってのそれであれば、まさにそこで形成されている世界（新しいネットワーク）が、知らない人々同志の思いを繋げているということであり（情報入手や交換、あるいは、それを活用した資金運用やビジネスの創出等）、それは、紛れもない「福音」であるということである！なお、昔は、「カンパ」（ロシア語らしい！）というものもあり、事実行為としては、従来から存在していたわけではある！

ただし、そこには、言い古されているように、「福音」とは真逆の、「犯罪」「不正」といった「悲報」の温床も、同時に存在している！「便利なものには、一方で、必ず落とし穴がある！」ということでもあるが、だからと言って、その恩恵を放棄することは得策ではない！しかも、待っているだけでは、事態は、悪くなることはあっても、なかなか好転しない？諺に、「待てば海路の日和あり」というようなものがあるが、物理（気象）的な潮目はあっても、人の世での、しかも目まぐるしく変わる状況にあっては、しかも、年齢や資金の有限性を考えれば、そうも悠長なことは言っておれない！現実は、厳しいのである！

ということで、結果的には、何とも陳腐な言質を為しているようにも思うが、ここで敢えて言いたいことは、カネや地位や名誉などに関係なく（言い換えれば、たとえ烏合の衆　孤独な群衆の中にあっても！）、ある人の思いを受け止め、それに応えたいという人が、技術の進展によって、新しい出会いやビジネスチャンスを生むということに注目しているのであり、それが貴重であるということである！弱き者同士の、一つの力（知恵）とも言えるが、是非こうした人々の動きが報われて欲しいものである！犯罪や不正等の悲報は、もうこれ以上聞きたくない⁈

（井上）☜

○「蜘蛛の糸」より凄い、もう一つの「「蜘蛛の糸」！

ひょんなことから、かの芥川龍之介の「蜘蛛の糸」のことを思い出した！最近の世相から、何か比喩になるものはないかと思ったからである⁉ジャンルとしては、児童文学ということになっているようであるが、私には、とてもそのようには思えなくて、人間社会（大人達）の醜い現実を、辛辣に批判している寓話と思えるのである（尤も、児童文学には、そのような要素が、もともと込められているとも言えようが？）！折角であるので、内容確認のために、これに関するネット記事を探したが、そこで大変な副産物？に遭遇した！それは、、サイエンス・フィクション作家小松左京（かの『日本沈没』の作者）の作品に、同名の掌編（超超短編）小説があるということであった。

そして、その解説によれば、「彼はまず、『カンダタが糸を放せと言ったのは当然』と評してこの作品を批判した上で、別世界の話として、同様の話を書く。そこでは、地獄に堕ちたカンダタは蜘蛛の糸を降ろされ、それを伝って上がり、ふと下を見ると、他の者も上がってくるのを見る。しかし、彼は彼らを追い落とすより、慌てて伝い上がることを優先、しっかり極楽に上がる。釈迦の方がこれに驚き、他の亡者の登上を阻止しようとして失敗、代わりに地獄に堕ち、亡者たちは極楽へ。しばらくたった後、カンダタが地獄を覗くと、釈迦が血の池で苦しんでいる。彼は以前のことを思い出し、蜘蛛の糸を降ろす。釈迦がそれに気がついて昇り始めるが、ふと下を見ると、何と地獄の鬼や閻魔まで昇ってくる。『お前たちそれは駄目だ』というと、蜘蛛の糸は切れ、釈迦は地獄へ真っ逆さま。」といったことだった！

何と言うパロディなのだ（しかも、この方がリアリティもある？）！神仏の加護を冒涜する、とんでもない代物だという言もあろうが、そうとも言えない⁉余計なことだが、同じモチーフの作品？が、内外に幾つかあるということでもある！やはり思うことは、一緒なのかもしれない⁉

○現代の「犍陀多（かんだた）」は？そして、「蜘蛛」は？

上記から続くものとなるが、芥川が描いた（ひょっとしたらパクっていたのかもしれないが？）「蜘蛛の糸」は、現代では、どのようになるのであろうか？私としては、小松のパロディの方が、よりしっくりいくような気もするが（誰が「犍陀多」かは別として！）、少し、私なりのオリジナルを加えると、そこで登場する「蜘蛛の糸」とは何かということである！お釈迦様（観音様）の方は、何となく分かるが、犍陀多が降ろすそれとは何かということである！どちらにも、それを降ろすことが出来るものとするのなら（小松）、それは何か？つまり、慈悲（偽善にもなり得る？）に代わるものということになるが、それは、やはり「正義」というものであろう⁉だが、それもまた、同じように切れる？

救いは、誰でも出せるということであろうが、問題は、何故「蜘蛛」なのか？そして、それに「糸」を出させるのは誰かということである！ちなみに、蜘蛛は「スパイダー」であるが、それが造る「ウェブ（網状組織）」は、まさに人と人との繋がりである？だから、「蜘蛛」が選ばれた⁉

〈短歌に託して～今回は、群衆と雲と蜘蛛？～〉

・ラーニング・ウェッブ！　今まさに
　教員に必要！　クラウドを信じ　活用せよ！

・そのクラウド　二つあり！
　雲と群衆だが　今やいずれも　味方となる⁉

・「技術」で、「思い」が合わさる！
　それは福音であり、生かさない手はない！

・「蜘蛛の糸」　弱き人間（ひと）への　救いの手？
　ただ誰が降ろすも　やがて切れる⁉

・結局は　みな「犍陀多」⁉
　ならばその糸　切れないように　工夫するだけ⁉

〈特別コーナー～堂本彰夫の古代史旅枕 ㊵～〉

○改めて、古代九州の全体像を探る－その１１

そこで、もし、そういうことであれば、例のおかしな話も（近畿の？）継体が、乱に勝利すれば、自分は長門以東（本州）を制し、亀麗火には、筑紫以西（九州）を任せると言ったということ、俄然真実味が出て来る⁉そして、まがりにも、その政権（物部政権→宣下家？）が、８世紀初頭まで、その九州年号を制定しているわけだから、倭国王権（九州王朝）は、少なくともその時までは存続していたことになる（６００年の「アマタラシヒコ」？も、その王朝であった⁉）！ただし、そこで齟齬が生じるのが、記紀が記す「雄略天皇」や「継体天皇」等の事績（否、存在そのもの？）である！

というのも、例えば「雄略天皇」は、即位（～逝去）年は４５６（～４７９年頃？）年とされており、宋に遣使した「武」（４７８年に即位？）とは、ほとんど被っていない？それよりも何よりも、「武」は、ある意味始祖王？的な存在であるので、雄略ではない（武）が雄略であることは定説とされているが？しかも、彼は、埼玉の稲荷山古墳及び熊本の江田船山古墳の鉄剣名にある「ワカタケル大王」ともされている？どうしたものか？）⁉

また、「継体天皇」は、応神から（→仁徳、履中、反正、允恭、安康、雄略（→清寧、顕宗、仁賢、そして武烈へと続いた「応神王統」を、まさに「継体」したかのように見せかけられているが（応神５世孫？ただし、その譜は後から送られたもの！彼は、九州年号の「継体」という名前を被されたということか？）、そもそも近江または北陸から招かれて即位したとされるので、少なくとも九州王朝の王ではない⁉ちなみに、「武烈」は、まさに二重の意味の「継体」のために捏造されているということでもある⁉

いずれにしても、ここでの問題は、５２８（→５１５）年の乱？によって、３世紀末から創り上げられてきた倭国九州（筑紫）王朝（高良山周辺域）が変質（崩壊？）し、そこから二つの皇統に分かれたということである⁉一つが、その倭国九州（筑紫）王朝を、文字通り「継体」した「（九州）物部王権」、一つが、そこから近畿に移動した（すぐにではない？）「（記紀が描く）継体王権」ということになるが、その二つの勢力（王統？）は、共に「九州（筑紫）倭国」のそれであったということである⁉（つづく）　（堂本）

〈編集後記〉今年も、残り一月！来週後半、再び宮崎に行くことになっているが、師走の本土は、さぞかし寒いであろう？その後多少の憂鬱？もあるが、やがて正月が来る！　（井上／堂本）